

竹内好における歴史哲学

孫 歌 氏

〈中国社会科学院文学研究所研究員〉



この壇上に立って、私はものすごく緊張しています。というのは、ここに集まっている方々のなかには、鶴見先生、松本先生のように竹内好と親しい関係を持っていた方々をはじめとして、竹内と同じ時代の息吹を吸いながら生きてきた方々が大勢いるからです。ですから、私が感じている緊張感というのは、こんな近距離にある歴史の時代に出会って、そしてその時代はまったく過去になってはいません。まだ生きています。そういう時代に巡り合ったという感じです。

今日、ここで話したいのは、「竹内好の歴史哲学」についての私の基本的な認識です。決して抽象的な話をするつもりはありません。ひとつの生きていた時代に出会うということは、実は歴史に入るという行為でもあるからです。私は、今日、この空間で、既に過ぎたと言われながら、まだ力強く生きていた歴史の時代に入ろうとしています。

その時代に入るためには、心の気力を必要とします。歴史学は文献学と違い、ただ文献を集める、いわゆる客観的な研究だけではできない学問だと思います。歴史は常に動いていて、その動いている歴史の時間は、均質な時間、すなわち自然な時間ではありません。歴史の時間という特殊な時間があります。その時間のなかで緊張があつて、そして緊張によってつづられた時間の連続は、歴史

感覚を生み出したものです。竹内好という人物は、むしろそういう歴史的な時間を象徴している人物だと、私は考えています。

生きていた竹内好に出会うチャンスは、私にはまったくありませんでした。そして、初めて竹内好を読んだのも、彼が亡くなってから11年経った1988年のことでした。私にとって、この竹内好をどのように読むかという大きな課題があります。彼をただ過去の人物として扱うことは、私にはできませんでした。竹内の悩み、竹内の戸惑い、そして彼が問いついた基本的な問題はいまでも生きていて、その課題は私の世代、私の次の世代の課題でもあります。その課題というのは何なのか。先ほど松本先生から、それについてかなり熱烈なご発表がありました。それを受けて、私はさらにこの話を続けたいと思います。

昨日、鶴見先生はとても興味深いお話をされました。竹内好の「大東亜戦争と吾等の決意(宣言)」をどのように読めばよいかという問題です。鶴見先生はとても面白い問題提起をしたと思います。竹内は日本国が滅びることを目指して宣言を出しましたと。私は方向としてまったく同感です。というのは、敗戦から8年経って、竹内好は「屈辱の事件」という有名な論文を書きました。その屈辱の具体的な中身について、こう説明したのです。

日本国が敗戦したということは、屈辱なこと



はありません。一斉に敗戦して、敗北を認めて、革命がまったく起こらなかったのは最大の恥です。日本には革命がありませんでした。それは恥ずかしいことです。では、仮に革命があれば、日本はどうなるでしょう。彼はさらに想像しました。アメリカ軍が上陸して、日本はバラバラになり、日本人はいろいろな葉っぱになって激しく内戦を起こすだろうと。そのときに自分はどの部局に属すればいいのか。自分は非常に情熱的にあこがれていました。結局、現実的に革命は発生しなかったため、彼はかなり失望しました。

同じ文章の最後に、彼は「五箇条の御誓文」の話を書きました。その竹内好は、いったい何を狙っているのでしょうか。私は現実主義的に、この文章を読んでいませんでした。そして「大東亜戦争と吾等の決意（宣言）」についても、同じ視座で読みませんでした。竹内が現実の戦争を言っているとは、私は思いません。彼は自分の歴史観を述べていたと思います。

午前中の話の続きですが、竹内好が「北京日記」を書いたときに、前面の舞台に登った人物、ストーリー、いろいろあります。そのストーリーの背後に、彼の焦りが隠されているように、私は読み取れました。その焦りについて、彼は日記のなかにはっきりとは書かれていませんでしたが、同時期の手紙のなかでいろいろと書いていました。

午前中に挙げた1つの例はそうでした。実はまだもっとラジカルな、あるいは露骨な書き方もあ

りました。それは武田泰淳あての手紙のなかで書いたものです。武田泰淳は、そのとき、第一線で人殺しをしています。ご存じのように、このつらい体験は、彼のそのあとの『司馬遷』を生み出しました。

しかし、竹内はまったく違うかたちでこの体験を扱いました。彼はこう書いたのです。

「あなたのような歴史の渦巻きの中にいる人間はうらやましいです。私のように歴史の外で、ただ混沌な毎日を送っている人間は、本当に気力がありません」。

歴史のなかに入るということが、竹内にとっていかに大事なもののかということ、私はこの手紙のなかで読み取りました。

しかし、その歴史は、日本の侵略戦争という歴史です。竹内はこの戦争に対する警戒、批判、あるいは反省がまったくないわけではありません。それにもかかわらず、彼がなおさら手紙を書いたのはなぜなのでしょう。これは私にとって大きな謎です。そして、この謎を解くためには、まず自分の歴史観を点検しなければなりません。竹内好を読めば読むほど、歴史は甘いものではありません。そして、ただ道徳、倫理だけでは判断できないようなものです。

しかし、かといって悪いものは歴史の軸になり、あるいは動力になるという意見だけには、私は従えません。歴史という力は、私たち個人の主体的な力だけではまったくコントロールできない恐ろしいものです。それを竹内好は実感していたと思います。

彼は、ときどきこういう話を漏らしています。例えば、安保闘争のとき、竹内好が岸信介に会いに行ったときに、こういう発言をしました。「あなたは歴史をつくる人です。私は歴史を記録する人です。ですから歴史をつくるために、歴史を記録するために、私たちには重い責任があります」。

結果として、岸信介は歴史をうまくつくれませんでした。けれども、あのようなかたちで歴史を

つくりました。そして、同じ時期に安保闘争に参加した普通の日本人は、一人ひとりみんな歴史をつくりました。この歴史は決して岸信介の方向に向いたわけではありませなし、安保闘争に参加した人たちの意志にも従ったわけではありませんでした。

誰の個人的な意志でもコントロールできない歴史の存在自体は、こんにちの歴史学のなかからほとんどはみ出されてしまって、歴史はあくまでも1つの正しい方向に沿って動いていく、透明な力のように見えるようになりました。ですから、竹内好と付き合いながら、私は自分の歴史観を深く反省して、いつの間にか竹内から歴史哲学の教育を受けました。

竹内好は個人の体験に非常にこだわっていた方です。しかし、体験は、そのままでは思想の源にならないという自覚も強く持っています。竹内好が、そのひとつの時代の印になれた理由もそこにあると思います。彼は具体的な事件を扱いながら、具体的な話をしながら、常にその背後にある歴史の冷たい、あるいは温かい動きを見つめているわけですから。竹内好の原理的な言説は、すべてそういうかたちでつくられています。

私が、ここで歴史哲学のテキストとして挙げたいのは、まず4本の論文があります。レジュメの最初のページに書いた『魯迅』「近代とは何か」「近代の超克」、それから「方法としてのアジア」。竹内好は、哲学というかたちを一度もとったことはありません。彼の書いた最も抽象的なテキストさえも、非常に具体性があるようなものです。それは「近代とは何か」というテキストです。

しかし、ここで挙げられた4本の論文は、いずれも読みにくいものです。つまり、彼の出したキーワードをつかんで、論理でキーワードの意味を追求すれば、ほとんど収穫はありません。しかし、克明に読めば読むほど、行間からいろいろな哲学のような問題が出てくるわけです。ですから、竹内という人の哲学的な思考は、一種のアンチ哲学

の特徴を持っているわけです。

なぜ私はそれを哲学として、あえて強調したかという、竹内の具体的な言説は、こんにちになって、かなりの部分は無効になってしまっています。普通、このような評論家はとくに忘却されて、時代に捨てられたはずなのに、竹内好というシンポジウムを開けば、なぜ、これだけの、その時代と一緒に生きてきた方々が集まるのか。つまり、竹内の無効になった言説の背後に、まだ何かある。その何かというのを、私はあえて哲学というように名付けたいと思います。

この哲学が東洋の哲学であるかどうかは、私にとって問題ではありません。それは東洋のものでいいし、西洋のものでも構いません。問題は、今までに私たちが出会った時代をうまく解く鍵が、ここにあるかないかということにあります。

そして、竹内は、時代の問題をいったいどのように解いたのでしょうか。あるいは、ただの問いとして問い続けて、それは結局解けなかったのでしょうか。それが私の関心がある問題です。

レジュメのなかでいくつかの問題を挙げました。ここでは「二、いくつかの概念のスケッチ」というところを飛ばします。ここはただ資料として、ご参考のために挙げたものです。ヘーゲルについての部分も飛ばします。そして、「三 2、運動というカテゴリーと歴史を書き換えること」について。ここから少し、私の読書の経験を述べさせていただきたいと思います。

竹内好が『魯迅』という論文を出したとき、彼は精神的な死を経験したあとの時期でした。精神的な死というのは、彼が「中国文学研究会」をつくり10年近く運営して、自分の手でこの会を閉じたという経験でした。

この会が閉じられた理由は、常識違反な理由です。つまり、うまく運営できずに、誰にも注目されずに閉じたわけではなくて、逆です。この会は当時の日本のなかで非常に有名な代表的な団体になりました。彼は自分のつくった子どもを自分の

手で殺してしまったという行為をしました。これはまさに鶴見先生のご指摘のとおり、彼はこういうかたちで死を目指しました。つまり、「廃刊」という言葉を使って、「停刊」という言葉を使わなかったところから、彼の死に対する態度がのぞかれたと思います。

そのあとに、『魯迅』というテキストが書かれました。『魯迅』をどのように読むべきでしょうか。いろいろな読み方が成り立つと思います。私はそのなかの1つの読み方を選びました。私は、魯迅研究書として読むのではなく、歴史哲学のテキストとして読みました。

『魯迅』のなかで一番難解な部分は、彼の歴史の進化論についての否定の仕方です。歴史は常に進歩するものではありません。そして、人間は常に変化するわけではありません。歴史は進歩しています。人間も変わっています。しかし、そういうことはどうでもよかったのです。最も重要なのは、その変わらないもののなかに潜んだ根本的な精神です。その精神とは何なのか。これは『魯迅』というテキストの中核だと思います。

竹内好にとって、中国の現代史、特に現代の文学史と一緒に生きていた現役の文学者は、魯迅一人しかいませんでした。なぜかという、魯迅は先駆者ではなかったからです。先駆者ではないということは、いつも正しい方向を示したわけではないということです。正しい方向を示さない魯迅は、揺れながら、挫折しながら、動いている中国の歴史を共にしました。一緒に挫折して、一緒に



揺れながら生きていく魯迅は、最後まで変わりませんでした。ですから、彼は歴史と一緒に生きられたのです。これは竹内の考え方です。

私は、ここからいろいろと学ぶことができました。それは魯迅に対する評価ではありません。むしろ歴史の中間物と言われた魯迅を通して、歴史の特質を見ることができました。歴史は、どのようなかたちで存在しているのか。例えば、私たちは現在生きていて、同時代史のなかを生きています。しかし、私たちは決して同時代史のなかを生きているとは限りません。生きながら歴史の外にいることは十分にあり得るし、おそらく知識人という種類の人間は、最も歴史の外にいる可能性が大きいと思います。

昨日からよく表れた、正しい左翼に対する批判は、突き詰めて言えば、おそらく歴史の外にいる人間に対する批判だと思います。ですから、こんにちにおいて、日本だけではなく中国も含めて、その歴史のなかを生きているために、いったいどのような素質が必要なのかという問題が大きな課題になっています。そこでは、おそらく左翼、右翼の分け方だけでは、うまく説明できないと思います。

竹内は「近代とは何か」のなかから、ある種のヒントを提供してくれました。これは運動というカテゴリーから歴史を見る、そして歴史を書き換えることを注目するという考え方です。

彼は古いものと新しいものについて、違うような意見を持っています。これは『魯迅』というテキストにつながっています。歴史は進歩して、発展は段階があるという考え方から見れば、古いものはほとんど価値がありません。新しい時代の課題にぶつかるたびに、過去の人間の言動自体は、ほとんどその限界を示したのですから、それは古いと。日本だけではなく、中国でも古いものはどんどん捨てられています。

しかし、竹内によれば、古いものは新しいものになれます。それはある自覚によってなります。

その自覚というのは、新しい時代のなかで表面的な現象を通して、その背後にある歴史の構造を見つめる場合には、古いもののなかから新しい可能性が現れます。そして、歴史はよみがえるのです。

歴史は生きられます。そうでなければ、古いものはどんどん捨てられて、新しいものをどんどん追求します。昨日ご紹介したように、アメリカの学者の言い方言えば、いろいろなポストは過去になって、これからはポスト理論の時代になるだろうと。そういう態度をとれば、おそらく古いものは永遠に新しいものにならないと思います。

古い服を脱いで新しい服を着る宿命は、知識人という人種に与えられて、私たちは永遠に、本当の意味での歴史に出会うチャンスを失ってしまいます。しかし、古いものはそのまま新しいものにはなりません。「近代とは何か」のなかで、竹内好は冒頭からそれを強調しています。

実は中国には、近代というものは昔からありました。宋の時代から市民社会もでき、自由貿易もありました。近代があったはずですが、それはありませんでした。なぜかという、近代という時代は自覚がなければ生まれてこない時代です。中国は外部からの衝撃を与えられたときに初めて、その自覚ができて近代という時代が生まれました。

このテーゼ自体は、おそらく溝口先生は反発するだろうと私は思います。この分析の仕方も、確かに非常にお粗末なもので、中国の歴史の実際状況に合っていないと思います。それにもかかわらず、私は非常に重くこの部分を読みました。なぜかという、その前に、彼は魯迅が歴史を書き換えたというテーゼを提起したからです。

歴史を書き換えるという行為は、決して歴史は簡単につくられるという意味ではありません。先ほど少しご紹介したように、竹内は歴史の冷たさ、人間のコントロールできない特質について、非常に自覚を持っています。ですから午前中にも少し言及したように、彼の文化大革命についての沈黙

も、同じ性質を持っていると思います。彼は文化大革命をどのように見ていたのか。何を考えていたのか。それは私には説明できません。しかし、説明できるのは、彼は明らかに、それを1つの歴史の段階として、それほど甘くない、重い段階として見つめ続けたということです。

彼は、1950年代に「評伝毛沢東」という、あまり成功しなかった評伝を書いたことがあります。その最後に、短い言い方ですが、非常に深いところで中国の原理について言及したことがあります。毛沢東には「根拠地哲学」というものがあります。その哲学は、敵をわがものにするという原理です。これは中国の原理だと、竹内は見つめているわけです。

ですから、毛沢東の軍隊にとって、武器生産の工場は東京にあります。これは、ただの「弁証法」という一言では片付けられないと私は思います。それは歴史を見るときの、歴史のまなざしそのものだと思います。おそらく文化大革命が起こる前に彼が感じていたこと、そのうちにやってくるこの歴史の時代。そういうことを予感したときの彼の感覚は、同じものなのではないかと、私は推測しています。

歴史というものは、竹内にとって軽いものではありません。簡単に裁けるものでもありませんでした。ですから、「五箇条の御誓文」から明治維新のあとの日本の可能性、そしてアジア主義、日本で繰り返して否定され、「近代の超克」という芳しくない座談会について、彼があれだけ慎重に扱った理由は、その部分にあると思います。

歴史は、それほど簡単にあとの人間によって裁かれないものである以上、私たちはこの歴史のなかで、どのような可能性をつくり出せるかという課題は、おそらく安易なものではありません。

竹内は最後まで頑張っていました。歴史の一番激動の渦のなかに身を投じて、そのなかから少しでも歴史の方向を変えようと努力しました。彼の努力が成功したとは私は思いませんが、その成功

といえなかった努力が、なぜこんなにちまた思い出されたのでしょうか。これはおそらく興味深い問題だと思います。

竹内の歴史の哲学は、常識の位相でつくられたものではありません。その常識の位相において、竹内好は日本のインテリのなかで反復されつつある、いわゆる合理主義の精神とたたかいながら、本当の意味での合理的な精神をつくろうとしたと思います。その本当の意味での合理主義、あるいは合理的な精神は、歴史の緊張した瞬間をつかんで離さず、そのなかから新しい可能性を生み出そうとする行為だと思います。ですから、私は、竹内好のすべての言論のなかから歴史を読むという

行為を学びました。

そして何よりも、歴史を扱うときの慎重さ。自分の力は歴史を裁けないだけでなく、歴史を動かすことさえもできないという自覚。そういうものを私は常に学びました。そのなかから自分の中国に対する責任、日本に対する責任、あるいは人類に対する、一人の文字で仕事をする人間の責任を慎重に考えています。ですから、私は竹内好を通して、歴史についての認識が正されました。そして、そこから正しくないテキストも含めて、もっと慎重に歴史を扱うという習慣が、ある程度身につけ始めました。これからも同じ方向で努力していきたいと思います。以上です。



●—総合司会 講演者であります、加々美光行先生から「無根のナショナリズムと竹内好再考」についてお願いいたします。